

## 博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	看護学分野
学籍番号	14S3051	院生氏名	根岸 貴子
通学キャンパス	東京青山キャンパス		
論文題目	夫が認知症の妻を介護する過程で直面する介護課題の克服プロセスとその支援		
審査結果 (枠で囲む)	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">合格</span> <span>不合格</span> </div>		
<p>&lt;審査結果の要旨&gt;</p> <p>1. 研究の概要</p> <p>本研究の目的は、夫が認知症の妻を介護する過程で直面する介護課題の克服プロセスとその支援を明らかにすることである。夫介護者 18 名とその支援にあたる訪問看護師・ケアマネジャー 11 名に半構造化面接を行い、修正版グランデッドセオリー・アプローチにて分析した結果、介護初期は【理由がつかめぬままの妻の異変】【家事の不慣れ】【見定まらない対応策】【受診の遅れ】の課題があり、介護限界を感じるまで 1 から 5 年が経過し【受診の遅れ】の問題が明らかになった。介護中期以降は【外部アクセスによる支援活用】【仕事のように介護をマネジメント】して、【妻の尊厳を支え安寧をもたらす】ことをめざし、【介護スキルの習得】【妻の良き介護者になるための自己調整】に努め、妻のよりよい介護者になるための自分作りをしていくプロセスが明らかになった。訪問看護師・ケアマネジャーは、【時間をかけて関係性を築く】ことを基本に【夫介護者が主体的に介護できる】ことを中心に支援していることが明らかになった。</p> <p>2. 研究方法、論証、論文形式の適切さ</p> <p>本研究は、本大学の倫理審査の承認を受け、患者・家族の会および施設の同意、研究対象者の同意を得て実施している。</p> <p>夫介護者の選出は、介護認識をもち、自己の状況を客観的に語る事ができる 3 年以上とし、支援にあたった訪問看護師・ケアマネジャーは、夫介護者のことをよく把握しているという基準で選出し、データを得ている。また介護初期と介護中期以降を「認知症症状の程度」「Basic Activity of Daily Living (B-ADL)」「身体介護の必要の有無」で規定し、修正版グランデッドセオリー・アプローチによって結果を導いている。副論文(原著論文)でもインタビューによるデータ収集、修正版グランデッドセオリー・アプローチで分析しており質的記述的研究手法において知識と経験がある。さらに、分析テーマ・分析焦点者の設定、分析手順が明確であり、理論的飽和化に達した概念が生成されたことから客観性が保たれている。論文の構成、文献の引用についても適切である。</p> <p>3. 知見の新規性と価値</p> <p>本研究の新規性は、認知症の妻を介護する夫に焦点を当てて直面する介護課題の克服プロセスとその支援を明らかにした点、介護初期と介護中期以降で明らかにした点にあり、在宅における夫が認知症の妻の介護で必要としている支援や介入法の基礎的資料に貢献する研究として評価できる。</p> <p>4. 口頭試問において適切に回答した。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p style="text-align: center;">主 査 糸井 裕子</p> <p style="text-align: center;">副 査 大熊 由紀子</p> <p style="text-align: center;">副 査 栗田 康生</p>		